■自己評価テストについて（その効果的な使い方）■

自ら学び自ら考える力の育成と，基礎・基本の確実な定着は，教育現場における重要課題である。本資料「自己評価テスト」は，これら教育の普遍的な課題に取り組む学習指導を支援する１つの方策として，児童自らが学習を振り返る評価のあり方を鑑み作成した。

1．これからの評価について

各単元の学習が終わると，その学習内容についてのテストをすることが多い。

そして，その結果（点数）をもとにして，児童の学習を評価していくことがほとんどであろう。授業では児童の考え方やその過程を大切にした学習を進めながらも，児童のそれぞれの違いに目を向けた評価は，なかなか出来ていないのが実情であろう。

これからの評価は，児童自身が自分の学習活動に対して振り返りながら（**自己評価**），がんばりや誤りを発見し，授業で使ったノートやワークシートなどをもとにつまずきの解消について考え，確かな自信へと変えていく**形成的評価**が中心になっていくと考えられる。

2．自己評価について（3 ～ 6 学年）

児童の解答の傾向には，次のようなものがある。

・しっかり自信を持ってかく場合

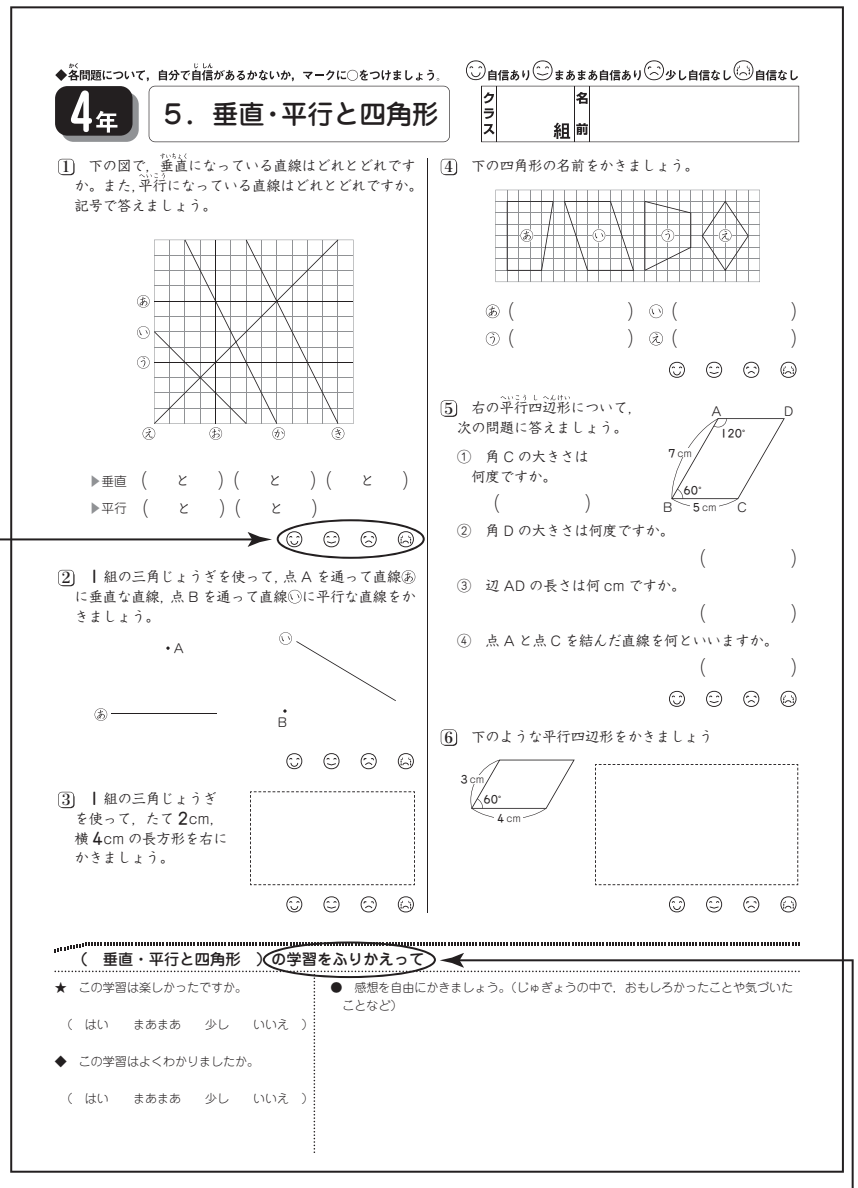
・なんとなく自信がなくてかく場合

・考えの根拠がなく，当てずっぽうにかく場合

1 で述べたように，これらの解答の違いを浮き彫りにし，自分の取り組む姿を見つめる手立てに変えていくことが大切である。

そこで，各設問の終わりにある下の４段階のマークで情意面を評価させたい。

指導者側は，その解答マーク（自己評価）を照らし合わせて，児童の学習に対する理解度として，返していくことが大切である。



〈例えば右の問題で〉

●全問正解で　☺ならば，

→　問題の内容をしっかり自分のものにしていることがわかる。

●全問正解で　☹ならば，

→　今回のテストでは正解であるが，理解面ではどこかに不安を持っていることがわかる。その不安がどこにあるか知ることが大切であろう。

●全問誤答で　☺または　☺ならば，

→　自分の考えはしっかり持っているのであるがどこかに大きな間違いがあり，そのポイントを見つけてあげることが大切である。

●全問誤答で　☹または　☹ならば，

→　はじめからていねいに指導しなければならない児童である。誤答を分析しながら，理解ができていないところを見つけて指導していく必要がある。

●数問正解，数問誤答で　☺または　☹ならば，

→　自分の考えが持てていない児童が多い。または，不注意から間違いにつながっている児童であるかもしれない。自分の考えをしっかり持っているのか，考え違いをしていないかどうか，ていねいに指導することが大切である。

3．単元を終えて授業の振り返り

1・2 学年については，その発達段階を鑑み，各設問における自己評価マークは行っていないが，ここで，単元全体を見渡して，1 学年は 3 段階，2 ～ 6 学年は 4 段階の評価を行う。また，2 ～ 6 学年の右の自由記述欄については，本資料に取り組んだ感想よりも，できる限り実際の学習活動について，印象的だったことを書きとめさせるようにしたい。「おもしろかったこと」「わかったこと」「またやってみたいこと」を具体的な言葉かけや，よく振り返りのできている児童の感想を取り上げ，自分を見つめる力を育てていくことが大切である。

4．ご使用にあたって

低学年では，初めてこの資料を扱うときはもちろんのこと，常時，指導者のきめ細かな指導のもと，自己評価させていくことが大切である。授業時における児童の様子を話題にするなどの工夫によって，児童の側も授業を振り返りやすくなるであろう。

学年が進むにしたがって，自分で自分の学習が振り返れるよう習慣化させていくことが大切である。また，自由記述欄については，指導者の授業反省につながるよう，児童に自由に記述させたい。